

鈴木大裕さんオンライン講演会とおしゃべり会 競争より協働の社会へ 子どものしあわせをはぐくむ教育とは



2025年9月23日

(火・祝)に、ふくおか教育を考える会オンライン講演会・鈴木大裕さん「競争より協働の社会へ」子どものしあわせをはぐくむ教育とは」を行いました。(当日参加…講演会57名・おしゃべり会28名)

16歳でアメリカへ留学。帰国後に公立中学校教員勤務を経て、現在は高知県土佐町議会議員として行政に携わりながら、教育研究に関する執筆や講演活動を行われている鈴木さん。

資本主義が生んだ格差社会や学校教育の問題点を指摘しながら、議論の枠組みそのものを問い直す視点の大切さを語られました。「不登校の子どもの教育機会をどう確保するか?」ではなく、「なぜ35万人もの子どもたちが、学校に行きたがらないのか?」

学校での学びについても「これって役に立つのか?」ではなく、「面白い・喜びがあるか?」と考えることで、問題点を可視化する。かつては可能性を感じた新自由主義教育改革の現状と負の側面に向き合った結果、「心に火をつける」教育こそが、子ども

にも、教員にとっても、生きる喜びに繋がると実感したというお話に共感しました。また、「いま必要なのは、民主主義の再生」と強調されていたのが印象的でした。子どもと教員と保護者が、教育環境の理念を理解することで連帯し、労働改革の運動が広がったシカゴの事例や、学力テストの点数だけではなく、どのような職種であっても人間らしく生きられる社会を創る必要性など、教育を考える会の活動に対する意欲が湧いて、元気をもらえる講演でした。

おしゃべり会では、時間ぎりぎりまで参加者と交流してくださった鈴木さん。機会があれば、ぜひ第二章以降も聴かせていただきたいです。

実行委員長は、東部教育を考える会代表の吉谷順子さんが務めました。

(文責・辻まどか)

ニュース

No. 174

2025年11月7日

310部発行

電話

協議会 406-4125
東 部 608-0960
西 部 322-3074
南 部 542-3578
中 部 522-4545
宗 柏 0940-34-3087

〒815-0037

福岡市南区玉川町
12-22-505

✉ f-kyoiku@helen.
ocn.ne.jp

HP: fkyoikuco.wixsite.
com/fkyoiku

*講演会

◆競争的な格差社会をどう見るか

「競争より協働の社会へ」このタイトルをいた
だいた時、まず思い出したのが、大阪・木川南
小学校・校長の久保敬さんが、当時の松井市
長に怒りの提言書を出したということです。

ことの発端はコロナ禍で全国一斉休校が始
まったことでした。松井市長が、いち早く記
者会見を開いて、「大阪市では、オンライン授
業を始める」ということを報道したわけです。
現場では、インフラさえ整っていない、家でオンラ
インできない環境の子もいっぱいいる、混乱を
もたらすだけだという思いがあつての久保提
言でした。

これただ単にオンライン授業がすぐにはで
きないということではなくて、日本全
体を取り巻く競争的なシステムについての提
言でもありました。

久保校長は「グローバル化により激変する
予測困難な社会を生き抜く力をつけなければ
ならないというが、そんな社会自体が間違
っているのではないか。そして今、価値の転換を
図らなければ 教育の世界に未来はないので

はないか。また生き抜く世の中から生き合う
世の中へ。そうでなければこのコロナ禍にも地
球温暖化にも対応することができないに違
い」と提言しました。

これに対して松井市長は、「今の時代子ど
もたちはすごいスピード感で競争社会の中を
生き抜いていかないとけない。義務教育の間
に基礎部分を伸ばし、みんなが全ての人を許
容している社会の中で子どもが生きていけ
ばそれは理想。校長だけど現場が分かってな
い。社会人として外に出たことはあるのか
と思います。」と言つたのです。

この2人の発言には、本当に大きな世界観
の隔たりがあります。大人たちが作つたこの
競争的な格差社会を「善」として子どもたち
に適用させるのか、それとも、そうじゃない
「非」として子どもたちにしか作れない新しい
社会の実現を彼らの教育に託すのかという違
いだと思います。

今、教室や学校を取り巻く、大きな社会の
流れが子どもたちの教育に現れているという
理解のほうが適切ではないか。

つまり子どもたちの教育を通して社会のあ

り方そのものを問い直す作業が求められてい
ます。

久保校長は、怒りの提言書を出した後、
「戦場に教え子たちを送り出した教師たちの
心理がどうしても理解できなかった。自分た
つたらそんなことは絶対しないっていうふう
に思つてた。けれども、今のこの世の中を見
てみたら自分はまさしく同じことをしている
のではないか」と言っていました。

競争的な格差社会の中で生き抜いていける
子たちを個別最適化して送り出すというこ
とを、今、教員は強いられている。親御さん
たちも不安ではない。本当に厳しい世界
なので競争力をこの子どもたちにつけないと
かわいそうなことになる。習い事、塾に行かせ
今だけ我慢しなさいと言うことになります。

◆花火大会はだれのもの？

2016年出版『崩壊するアメリカの公教
育・日本への警告』に、花火大会の有料化につ
いて書いています。

2023年の千葉市民花火大会のチラシで
は、A席・B席・C席と売られ、行政が、「チケ

ツトを持つてない人は来ないでください」っていうことを公然と呼びかけ始めた。日本もここまで来てしまったかというふうに愕然としたのです。みんなのものであった社会の富を囲い込んで、商品化して、行政が、序列化し始め、排除し始めました。

この年にもつとも物議を醸したのが琵琶湖大花火大会でした。大会経費3億円を賄うのに有料席5万席準備。一番安い席で4800円(ジャーシート席)。もし席に座りたければ6000円。エグゼクティブシート2万5000円、床几席が6万円。この年一番高かったのは小田原の30万円のベッド席。花火大会だけでなく、青森のねぶた祭りでは100万円の床几席、阿波踊り20万円の床几席が話題になっていました。

小田原の大花火大会では、高さ4メートルの目隠しフェンスを作った。これに対して、地元自治連合会が反対決議をしました。有料席を購入できる人は限られていて、公平性に欠けると。地元の人が見られないのだしたら、何のための花火大会なのかと。

その自治連合会の会長が「この壁が人々の

気持ちを変えてしまう」と言っていたのです。目隠しフェンスで見られなかった人は、来年になつたら、大人になつたらこの塀の向こうで自分たちも花火を見るって思ったでしょう。そうやって我々一人一人の心の奥底に、物・金の新自由主義的な価値観が深く入り込んで、いつしか自分たちもその歯車となつて必死こいて勝ち組になろうと目指してしまふ。知らず知らずのうちに自分たちも競争的な格差社会を支えてしまっているのです。

◆受け身で従順にする賢い方法

『崩壊するアメリカの公教育』から引用します。ノーム・チョムスキーというマサチューセッツ工科大学の名誉教授がいます。彼は言っています。「民衆を受け身で従順にする賢い方法は、議論の範囲を厳しく制限し、その中で活気ある議論を奨励すること。」

この花火大会の議論の枠組みは、膨張する経費をどう賄うのかです。行政はこういう狭い範囲の議論の枠組みを我々に押し付けてくる。やれ有料席を作ろうじゃないか、それでも足りないから観客席を増やそうじゃないか

と。それでも足りないからA席B席C席とランク付けしようじゃないかと。もつと買ってもらえるように目隠しフェンスを作ろうじゃないか、もう来ないようにチケット持つてない人は来るなど言おうじゃないかと、活発な議論を奨励するわけです。

でも花火大会は誰のものかという広い議論は、問われないのです。

千葉市民花火大会の歴史を遡ってみれば、戦後復興に明け暮れていた市民の憩いのために作られたイベントだったのです。大事なのは、そもそも採算を取るイベントじゃなかったことです。だから千葉市民花火大会だったのです。今、名前は「幕張ビーチ花火フェスタ(千葉市民花火大会)」に変わっている。市民がかつこに入れているっていうことを我々もつと怒った方がいいと思います。千葉市議会の議事録では、千葉市民花火大会は、公然と稼げる商業イベントっていうふうに言われているのです。みんなのもの・社会の富であったものが一つ一つ囲い込まれて商品化されて売られていく。その過程の中で、市民は消費者となり下がっていくのです。

◆部活動は、権利？商品？

そういう目で見ると、学校部活動の地域移行も違った見え方がしてきます。一昔前は、小学校6年生の間では「中学校に行ったら何の部活やる？」との何気ない会話がありました。部活動は、すべての子どもたちにわけ隔てなく保障された権利だったのです。

本来であれば買うようなものでもなかった部活動が囲い込まれて、そして民営化されていくわけです。文科省だけがやっているのではなく、経産省やスポーツ

省が絡んでいる。相手によって違ったことを言う。

教職員を前にすると、「これは皆さんの働き方改革です」と言う。過重労働はすぐにでも是正しないとイケないと。ひいては部活動は学校から切り離しましょうと言う。でも民間企業・スポーツ産業に対しては

学校部活動の「地域移行」



全く別のことを言います。「皆さんこれからは公立学校の運動場、体育館、プールなんかを民間企業が使ってビジネスとして採算が取れるようにしていきます」って公言しています。指導者に対する謝金も発生することも明言しています。だから部活動もお金を出して買う商品へと変わってしまいました。

部活動というサービスを買うことのできる家庭とそうじゃない家庭が出てきます。それだけじゃなくて、中山間地域のようなところ

では、そもそも野球部がなかったり、サッカー部がなかったり、スポーツクラブがなかったりするわけです。でも都市部に行けば、いろんな受け皿があるわけです。そうなると地域間格差も出てきます。

結果として、子育て世代が、子どもにスポーツとか文化活動をやらせたい時に、都市部に

出ていくしかなのです。そうなると都会の一極集中を加速させるでしょう。

思い出してください。「民衆を受け身で従順にする賢い方法は、議論の範囲を厳しく制限し、その中で活気ある議論を奨励すること。」

「部活動は学校でやるべきか地域でやるべきか」。そういう狭い議論を行政は押し付けてくるわけです。どっちがいいですか。そりゃあ地域でやってくれるのだったら地域の方が楽だと教職員は言うでしょう。でも、さっきのチョムスキーの「議論の枠を厳しく制限すること（フレーミングという）」を思い出してください。

◆なんでもお金で買える

今、何でもお金で買える。夏休みの終わりに読書感想文をメルカリで買う時代です。時間もお金で買う時代です。USJのエクスプレス・パスというものでは、お金を積めば列に並ばなくてもいい。金持ちは列に並ばなくてもいい。花火大会の目隠しフェンスのように。

こうやって社会の至るところで、勝ち組になるように子どもの意識を駆り立たせるメッセージがあります。毎日のように子どもたちに

刷り込まれ、上昇志向が染み込んでいく。

今、公立図書館の命名権までお金で買える時代です。大阪市立中央図書館が200万円です。『辰巳商会中央図書館』と落札されました。至る所でそういうネーミングライツっていうものが売られている。これもどうやって予算を賄うのかという狭い議論の枠組みです。

でも「なんで公共の音楽ホールとか美術館が自分で稼ぐの?」「文化で稼ぐってどういうこと?」というような本来の議論をしないといけないのです。

公立小学校さえお金で買う時代です。私立に入れるよりも、公立のブランド小学校の近くにマンション買って転居した方が安いとなる。都会では、ブランド小学校の周りに高層マンションが立ち並び、子どもの進学を転機に転入する人たちが激増している。これが周りの地域に影響を及ぼさないはずがないです。高層マンションが立ち並ぶと高級志向の店が増える。そうしたら低所得者用の店がどんどん排除されていきます。

アメリカでは、地域間の教育格差が激しいので、「子どもの教育は、郵便番号で買え」と

なっている。日本でもそうなりつつある。

大阪で平成27年4月から学校選択制が始まりました。日本全国どここの地域の学校に行っても、遜色ない学校、教育が受けられるのが義務教育の概念。でもそうじゃなくなりつつあります。いい学校、悪い学校が、序列化されているので選んでくださいということです。

◆新自由主義の時代

そもそも、何で全ての学校を良くできないのかという議論には、ならない。ここで大事なのは、良い教育は、「家庭に与えられる選択肢」なのか、それとも「全ての子どもたちの権利」なのかということです。本来であればこういう議論をしないといけない。何で、市場型学校選択制がいとも簡単に許されてしまうのか。こんな時代をどう考えるか。世の中のあるりとあらゆる出来事を、経済的な観点からのみ捉えようとする新自由主義にあると言えます。

◆姿を変える教育

そんな中で教育はどうなるかと言えば、個

人に対する付加価値的な投資という価値観になるわけです。教育が、お金で買える商品へと姿を変えます。子どもは、今どれくらい投資をしたら、どういうリターンが将来的にあるのかという考え方になります。学校と教員は、教育という商品を提供するサービス業です。子どもと親は、カスタマー(お客)です。教育委員会は、カスタマーサービス(クレーム受付係)へと姿を変えます。こうなると、人間関係に影響を及ぼしてきます。子どもと親はクレームを教育委員会にするようになる。

学校をすつ飛ばして、カスタマーサービスに文句が行くようになれば、教育委員会は現場を締め付けます。そうすると学校と教員は、もはや保護者や子どもの方を見て教育をするのではなくて、教育委員会の方を見て教育をするようになる。そういう状況が起きているということです。

◆お客様を教育するジレンマ

学校が、お客さまを教育しなければならぬ厄介なジレンマを抱えます。学校は、子どもを育て、教育する。そういう機能は、まだ建

前上は残っているわけです。なのに、登校してくるのが生徒ではなくてカスタマーであるということ。生徒や保護者に口では先生と呼ばれるのですが、扱いはサービス業です。お客様の言う通りにする。そうしたら「もつと先生らしく」って求められる。どうしたらいいのとなる。教員たちは引き裂かれるわけです。

中学校の恩師が言います。「教育者として子どもの顔色を観察するのは大事。ただし教員が子どものご機嫌を取るような事では、子どもが育つわけがない。そんな環境では教育という営みそのものが成り立たない」と。

◆ジレンマに対する楽な対処法①

お客様を教育しなければならぬジレンマへの楽な対処方法。1つ目は、教育を捨ててサービスに徹する。学力向上に徹する。お客様の点数を上げているのだから文句ないでしょう。そうになると、じゃあ学校と塾の違いは何なのっていうアイデンティティ・クライシスに陥ってくる。それだったらもう塾

教員のいない「個別最適化」 『崩壊するアメリカの公教育 第1章』



で良くない?という話になってきます。

千葉県の2年前のニュースでは、小学校の算数の授業を塾講師に委託して学力向上をする。そういう実証授業を始めて、昨年は算数だけでなく他教科にも拡大されました。

アメリカのこの学校(写真左上)では一度に130人の生徒を監督できるシステムを取り入れています。生徒は、コンピューターでテストを受けるのです。一問正解したらもつと難しい問題、それにも正解したらもつと難しい問題、間違えたらもうちょっと簡単な問題。そうやって個別最適化が行われていくわけです。

このシステムを導入することで教員を雇う必要がなくなり、非正規免許の教員を1時間15ドルで雇って、130人の生徒を監督させる。それによって点数も伸びるし、経費も5000万円削減できたというところで、アメリカで最も急成長した公設民営学校です。

皮肉なのは、全国学力調査と結果責任という議論の枠組みの中で、教員や学校が結果を出そうとすればするほど、学校も教員もいらなくなっていくます。あまりにも貧弱な学力観の中で「学力向上」というスローガンのもとに突っ走っているからです。

◆ジレンマに対する楽な対処法②

お客様を教育しなければならないジレンマに対する楽な対処方法の2つ目は、業務のマニュアル化です。クレームが来なければいいわけですから。1つは授業のマニュアル化(学習スタンダード)、もう1つが生徒指導のマニュアル化。

今や全国どここの教室に行っても似たような授業がされている。板書の仕方までそっくり。筆箱の置き方、手の上げ方も規定されている。ロッカーの中も全部マニュアル化されている。生徒指導が最もクレームがつきやすいところ。それに対してどうするかといったら、校則もマニュアル化して、生徒が逸脱行動をしたらマニュアル通りに進めていく。

例えば学校を抜け出した時、はい1回注意

です、はい、2回目です。3回やったらアウトですっていう感じです。先生が声を荒げなくても、生徒がその問題を正さなくてもいいのです。何か問題となった時に、こう指導しましたという説明責任さえ果たせばいい。生徒の心の成長なんかは二の次ということです。

何か手に負えないことがあったら、すぐに警察呼びなさいと言われていきます。学校警察連携制度というのが全国の都道府県ですでに敷かれています。先生は、声を上げる必要もないし、生徒をつかむ必要もない。すぐに警察に電話をして連れていってもらおう。

学校に警察を招き入れる、教え子を警察に引き渡すことは、ありえなかったことです。これから予想されるのは出席停止命令が乱発されるでしょう。ちよつとでも面倒な子はすぐ出席停止になり、子どもの教育を受ける権利がどんどん不安定になっていくでしょう。

◆ゼロ・トラレンスの行き着く先

アメリカにおけるゼロ・トラレンスと教育の特権化ということで崩壊するアメリカの公教育」に書いています。アメリカでは、出席停



止命令というのが乱発されて、停学処分になる子が年間300万人というとてもない数字になっていったのです。そうやって、いとも簡単に生徒が停学処分を受けるとどうなるか。その子だけに影響があるのでなくて、周りの子たちの教育を受ける権利が不安定なものになっていくのです。

ハンナ・アレント(ドイツのユダヤ人哲学者)が、ナチスを例に話しています。いつ自分がナチスに捕まるかわからない。捕まったら、アウシュビッツに入れられたら、全ての人権が剥奪される。その当時、捕まった人たちだけへの影響じゃなかった。その他の市民たちの人権もいつ

奪われるかわからない不安定なものにさせられたのです。

学校が、学力向上という名のもとに塾化していき、生徒の人としての成長なんて関係ないとなる。とにかくクレームが来ないように、すぐに警察を入れる。その結果、少しずつ学校から人を育てるという機能が失われている。

◆「ちがう・かわる・かわる」

副題として、「子どもの幸せを育む教育とは」ということでお題をいただきました。

大田堯さんが、『ひとなる』という本の中で『ちがう、かわる、かわる』、人というのは、これを繰り返すことによって生きている。人だけじゃなくて生命あるものは「ちがう、かわる、かわる」。これが生きるこの実相だ」と言っています。

命あるものは、一つとして同じものはない。これは、DNAの発見が証明しているわけです。その違うものが他者と出会うことで、いろいろなことを学ばわけです。いろいろな他者と出会って、初めて世界に唯一無二の私という存在に気づく。自分にとっての敵だとか、味方だ

とか、自分を守ってくれる存在だとか、こういう考え方もあると気づくのです。

人が社会で生きていくことは、他者と出会って、関わって、そして折り合いをつけて学んでいく。それが変わることに。自分を押し通したって一緒に生きていけない。

大田さんは、「生きることは、学ぶこと」だと言います。哺乳類だったらおっぱいを吸うことを学ばない子は生きていけない。敵と味方を見極められない個体は生きていけない。水の確保の仕方だとか、安全な居場所の確保とかも学ぶことができれば生きていけない。

◆学校の役割とは？

そこから考えると学校の役割は、そもそも生きようとしている命を支援するだけではない。だから「教える」は間違っている。そもそも学ぶう、生きようとしているのだからそれを後押しすること。学校はどんな場所なのか。地域から集ってきたさまざまな子どもたち一人一人の人格の完成を可能にする場なのです。

いろいろな子どもたちが地域にいます。学校が地域の核となって、いろいろな子どもたち

が集ってきて、一人一人の自己実現を支援する場所というふうに考えられるのだと思います。教師の仕事は何か。子ども一人一人の自己実現に寄り添って支援する仕事だと思います。

◆学校の本当の働き方改革を

学校における働き方改革は、本来であればそもそも学校とはどんな場所なのか、教師とはどんな仕事なのかを議論しないことには話が進まないはずなのです。その確固たる部分をすつ飛ばしてやっているから、変なことになってしまっている。人格の完成には何が大事で何が関係ない業務なのか。それを軸に先生の業務を選んだらいいと思います。

人格の完成とは関係ない仕事はいっぱいあるはず。予算をケチってやっているから教員が大変なことになっている。もっとシンプルに考えられるはず。人格の完成を可能にする学級規模は何人ぐらいなのか。生徒が何人ぐらいだったら一人一人の自己実現を支援できるか。人格の完成を可能にする授業準備の時間はどれくらいなのか。本当に子どもたちの自

己実現を考えたら、どうやってこの子の心に火をつけよう、そういう授業を準備するにはどれくらいの時間が必要なのかというのを考えないといけない。そこから考えると教師一人一人の持ちコマ数は何時間くらいだったら十分な準備ができるだろうと、そういう発想になるのではないかと思います。

今、働き方改革という名のもとに、教育の営みそのものが崩壊の一途を進んでいるように思います。

◆学力とは？ 多重知性理論から

現大阪の知事で元大阪市長の吉村さん。彼が市長になって、全国学力調査の結果、大阪市が政令指定都市中2年連続最下位だったことにぶち切れて、記者会見でこう言ったのです。「来年からは全国学力調査の結果を教員の給料・校長のボーナス・学校への予算配分に反映していきます」と。いわゆる能力給制度というものです。さらに彼はこんなことを言いました。「子どもたちの学力向上の努力をし、結果を出す教員が高く評価されるのは当然でしょう。何がいけないのですか」って言うわけ

です。

チョムスキーの話を思い出してください。そもそも「学力って何？」っていうところは問われてないので。

全国学力調査は、二教科です。国語と算数のペーパーテストです。たったその二教科で生徒を評価して

いいのかと思います。社会

が得意な子はどうなる。音楽、体育の得意な子はどうなる。なんで国語と算数だけで先生や、学校や、生徒を評価するのだろう。そんな無神経なものでいいのかって、いろんな問いが生まれてきます。

四半世紀以上前にハーバード大学の発達心理学者のハワード・ガードナーが「多重知性理論」を打ち出しています。知性はIQがよく知られています。でも彼はIQに疑問を持ったのです。人間の知性って、一つの指数で測れるようなシンプルなものなのか。もっと複雑なのではないかという疑問を持って、研究を重ねてい

ガードナーの多重知性理論



つたわけです。

彼がたどり着いたのは、少なくとも8つの領域が人間の知性にはあると。論理数学的な知能もあれば、博学的知能も。視覚・空間的な知能に長けている人は、ルービックキューブ

が上手だったり、または絵を描くのが上手だったり、言語がすごく長けている人もいる。もちろん運動的な知能もあるし音楽的な知能もある。もっと言ってしまえば、内省的な知能、対人的な知能もあるのです。

◆ここでも、君でしかないこと。

人口850万人のニューヨークから4000人弱の土佐町に来て、初めて担当した仕事が、地域に唯一の高知県立嶺北高校の「魅力化」というものでした。当時は土佐町の子どもたちだけでも嶺北高校に通えればいいという消

極的な発想だったのです。「そうじゃなくて、ここでもできない教育をすることによって全国から生徒を呼びませんか」と提案をしたのです。「でもそんなこと言っても、うちには山とか、あとダムしかない」って言うわけです。

嶺北高校にはカヌー部がある。地域の要となるように超優秀な外部指導者を町で雇用することを提案しました。超一流のカヌーの外部指導者を土佐町で雇いたって全国カヌー連盟に相談したら世界最強国のハンガリーから元世界チャンピオンを連れてきてくれたのです。この人が来てくれて、そしてカヌー留学っていうのを始めて、全国から生徒をカヌーで引きつけるようになりました。逆転の発想です。

ガードナーの多重知性理論に話を戻していくのであれば、生徒はやはり一人一人いろんな能力を持っているわけです。それを生かすために大学に行くだけが成功の形じゃないことを示していくことが大事だと思います。こんな道筋もある、ということを私たちが意識的に子どもたちに提示することが大事。

わざわざ嫌いな勉強をするために、みんな

がみんな大学に行く世の中って気持ち悪いと思います。行きたくないのだったら行かなければいいし、逆に行きたい子が勉強できるような奨学金をつけたらいいのです。

◆子どもの心に火をつけてこそ

コロナ禍で全国一斉休校がありました。休校が終わって子どもたちみんな学校の再開を楽しみにしていた。早く友だちと会いたい、先生と会いたいって。残念だったのは、行政が教育現場に「どうやって失われた授業実数を確保するのか」という狭い枠組みを押し付け、その中で活発な議論をさせました。その結果、昼休みの短縮、夏休みの短縮、土曜授業などが行われた。一日8時間授業をしている小学校もあると聞いて、愕然としました。そんなことをやったら、学校嫌い、勉強嫌いを大量生産するようなものじゃないですか。

ウィリアム・バトラー・イエイツの言葉があります。「教育とは、バケツを満たすことではなく、心に火をつけること。」

もしこの観点で失われた授業時数を考えてみたらどれだけ違っていただろう。限られた時

間でどうやってこの子たちの心に火をつけるか、そういうふうな授業をしてくださって先生たちを鼓舞すべきだったのです。

アメリカの教育哲学者のジョン・デューイが「教育は人生の準備ではなく、人生そのものに価値がある。」という言葉。学ぶことそのものに価値がある。そういう問題提起だと思おうのです。

日本の教育では中学の勉強は、高校受験のため。高校受験は大学のため。大学の勉強は就職のためって常に次の人生の準備になり下がっているのです。

こういう中で、子どもたちの学びに喜びはあるのかが見失われている。教員だったら一度は生徒に言われたことがあります。「先生これ何の役に立つの?」って。「役に立つ、立たないっていう問題じゃない。面白いかどうか。これ面白くないか?」人生が豊かになるとかそういう視点から考えたらどうかって思います。

◆「面白い!なんで?」が火をともし

そういう観点から講演で招いたのがイグノーベル賞受賞者の金沢大学の広瀬教授でした。

イグノーベル賞とは何かと思ったら、人を笑わせ考えさせる研究に送られる賞です。

広瀬教授が何をやったかと思ったら「ハトに嫌われた銅像」という研究をしたのです。めちゃくちゃ面白いじゃないですか。公園に行ったら銅像が立っていて、糞にまみれている。でも一つの銅像だけピカピカだった。なぜだろうって気になった。復旧作業に関わることできて、その中で分かったのは他の銅像と比べてヒ素の配合度が他の銅像よりも高かった。その配合度の高さによって、鳩が嫌う電磁波が出ていたことが分かったのです。

いろんなおもしろい研究いっぱいやっているわけです。そういう研究の話をしてもらった。「なんだろう?」って不思議だから勉強したい、ただそれだけの話です。本来学問とはそうあるべきです。

◆学校に望むこと

僕が学校に望むことは、シンプルです。子どもたちと学ぶ喜びを分かち合ってほしい。子どもたちに学び方を教えてほしい。

子どもたちが学ぶ喜びを分かち合えて、学び方

を知っていたら、どんどん自分たちで勉強します。自分たちのやりたい研究をしたり、読みたい本を読んだりします。

もっと言えば、生きる喜びを分かち合ってほしい。この3つだけです。そういうふうな学校づくり、教育づくりというのが求められているのではないかと思います。

*質疑応答

(質)今の指導要領は人格の完成というよりも社会に役立つ人材というのを目指している。

(鈴木)教育基本法に書いてある人格の完成という言葉は、私たちが本当にしがみつくべき大事な理念だというふうに思います。

(質)心に火をつける教育を実践するため、私たち市民は、どんな行動があるのでしょうか。

(鈴木)今度の新学習指導要領においても柔軟性を確保することは議論されているのです。授業時数の標準授業時数は変えないけれども、その中で現場が研修にも使っていくようにするというようなことを言っている。だとしたら授業の時間を研修にして先生たちがインプットできる時間にしたらいいかなと思います。

昨年、議会でアンケート調査をお願いしました。「教員は、授業準備の時間を勤務時間の間にとれているか」「労働基準法で定められた45分の休憩時間を勤務時間内にちゃんと取れているか」「アンケート結果から」「両方とも取れてない」という答弁。「休憩時間がとれてない」ということは、労働基準法違反ですか」「そういうことになる」と。教育長が、労働基準法違反が行われているということを認めた。

「だとしたらそれに対してどういう措置を取ったか」「そこで、授業時数超過を翌年度からゼロにするという措置を取ったのです。夏休みの学校が閉まる閉庁期間を1週間じゃなくて1ヶ月にしたらどうか。先生たちが、インプットする時間を作る。先生たち一人一人が心に火を持つて、こういう学ぶ喜びを子どもたちと分かち合いたいなというふうな、そういう環境を作る。

(質)家庭教育も大事。そこをいかに支えるか。

(鈴木)今の僕が住んでいる土佐町のような、過疎の地域。そこそ顔と顔が見えるような人間関係が残っている地域からしか日本の教

育は、変わっていくのかもしれない。お客様を教育しなければいけないジレンマをいかに解消するのが一つの課題だと思います。学校が生徒や保護者をお客様扱いしない。逆に言えば子どもや保護者が学校をサービス業扱いしないこと。

学校をサポートしたいと思っている人たちとパートナーシップを組むことが一つ大事だと思います。今の教育現場が置かれている状況をちゃんと保護者に教育して、リーダーを育てる。そういう親たちが集会の時にマイクを握って、先生の代わりに打ち明けるような民主主義の再生をしていく。

(質)受験のために学校が次のステージの準備にならざるを得ない。また、私立高校が実質無償化されると競争にさらされる。

(鈴木)私立高校の無償化に関しては、一見、保護者にとっていいように見えて、実は毒団子です。私立学校の存在意義は、教育の多様性の保障だと思います。維新の会が、大阪で公立高校を学校統廃合してめちゃくちゃ減らしました。地域の学校がなくなっていく、私立高校の無償化をすると、生徒の奪い合いをせざる

るを得ない競争状況に追い込まれていく。教育の多様性の保障じゃなくて、勝ち組の学校、負け組の学校、そういう風になっていく。本来やるべきは、学校の序列化ではなくて、公立と私立とちゃんと割合を決めて無償化をしていくこと。愛知では、条件を決めて教育の多様性の保障をすることのための私立高校の無償化を目指しています。

それと、そもそも子どもの教育にお金がかかるっておかしいという議論をしないといけない。大学もタダでいいのでは。だけど、みんながみんな大学に無理していく必要はない。行きたい子にはどんな経済状況でも行けるような状況にしたい。

（質）部活動の地域移行に疑問。部活動が、サービス業になっていき、お金がかかる。

（鈴木）行政の方で、お金で買うべきサービスとらないような予算措置をする。自治体は子どもたちの権利として、これからも保障していく。今まで学校教育の一環として位置づけてきたスポーツや文化活動に子どもたちが触れる機会が人格の完成と関係があることを示す。それと、教職員が、搾取されて成り

立つ部活じゃないように十分運営できるような人と予算をつける議論が必要。

（質）教員が、うつや過労で倒れる実情もある。市とかが、生徒の権利を保障する形でサービスを保障するという形にしないといけないのではないか。

（鈴木）その通りです。基本的にやっぱり人格の完成です。それをどうやって行政が守っていくかということだと思います。

講演会 感想

▼時代がものすごく速いスピードで進んでいて、のんびりしていたら置いて行かれてしまう。それを自己責任と片付けられてしまう世の中。子ども達がそんな社会に適応できるように大人になるまでに様々なことを身に着けて欲しいと思ったりしてしましますが、そもそもそんな社会に疑問を感じないといけないというところに気づかされました。学校が子どもの人格の完成の助けとなるような場所になってほしい。親として何ができるだろうかと考えさせられます。

▼時宜にかなった内容で、教育の目的や学校の授業に臨む教師の方向性「火をつける」など、土台に教育基本法や子どもの権利条約がしっかりと据えられた内容でした。ぜひ、これから子育て・教育に共同していくための指標にさせていただきます。

▼「狭められた範囲の中で、活発な議論をさせられている」と言う話も、わかりやすかったです。「そもそも」の部分から注意深く考え直せば、すっきりと大切なことが見えてきますね。だれしにも権利として保障されなければならぬ教育に、もっと予算をつけて、「子どもの心に火をつける」学びを子どもと一緒にできる先生を増やしてほしいです。私自身もそんな先生になりたいと思いました。

▼先生の働き方を考えることは生徒への教育の質を高めることにつながることを実感しました。生徒、保護者、教員でタッグを組んで、今の枠にはめようとするような教育を見直し、子どもたちが学歴のために勉強するのではなく、自分の好きを見つけるたくさんの方との出会いにつながるような活動ができる魅力的な教育現場になるといいなあと思いました。

また、自分自身もそこに関わっていききたいと思いました。

▼やはり、そもそも論が大事だと思いました。教職員の働き方改革といつて何でも放り出すのではなく、学校がどうあるべきなのか、公教育の原点に帰って話し合わなければいけない。市場原理が働く民間のサービス業に任せてはいけない。地域の中で、学校と保護者と自治体で知恵を出し合って行きたいと思います。

▼学校の本来あるべき姿、学校に望むことについて、「子どもたちと学ぶ喜び・生きる喜びを分かち合ってほしい」、「様々な子ども一人一人の違いに丁寧に関わり、関わる中で、子どもたちの多様性を祝福する」そして「一人ひとりの人格の完成を可能にする場所」、というメッセージが、とても印象的でした。

▼学校教育はそもそも公共であるという憲法及び教育基本法の基本があらためて意識される必要を感じました。私も新自由主義の言うところの自由と、フランス革命以降基本的人権獲得後に共有された自由との違いを学んでみましたが、今、改めて公共という概念を持ちたいと思いました。

▼生き合うことの大切さを改めてかみしめました。子育てをしながら漠然と、障がいがありこの子が安心して生きていくためには…と不安が常にあります。視点を変えると全く違った生き方になる。でも、この大きな都市でのくらしではつい、多数にのまれ知らないうちに流されてしまう。ジレンマです。まずは顔が見える人と話すことからかなと。まだまだ学ばねば…です！

▼議論の幅を狭められた状態で議論させられないように、真に議論すべきことは何か、本質をよく見極める心眼を光らせ、多忙さゆえに目の前のことに精一杯で思考停止になりがちだが何とか踏ん張らねばと思った。また、自分も経済主義にいつのまにか取り込まれていて、ジレンマやモヤモヤを抱えながらやっていくしかなくて、自分を守るため割り切ってしまつてサービス業をしていたかなと思う。子どもたちのためになつていたかどうかと振り返った。自分が子どもの頃は、すでに学歴社会、受験戦争、校内暴力、いじめ、リンチなどが問題となつており、家庭も不況の波にさらされていた。しかし、まだ学校と保護者は分断されて

いなかったように思う。今PTAが無くされたり、学校任せだつたり家庭だけで育児を抱え込んだり様々な課題が浮かび上がってきている。子どもたちのために地域と家庭と学校ともう一度、連携することも大事だと思う。

▼今、学校現場は、過重負担・過重労働、保護者からの、時に行き過ぎたクレームへの対応、「人格の完成」よりも点数重視の学力向上、「子どもの権利」を無視しているかのような学校スタンダードづくり（昼休みの15分間短縮・朝や放課後の遊具使用禁止・移動教室の際の1列無言移動の強制等）、仕事量・業務内容はそのまま残業時間の短縮ばかりを求められる働き方改革など、まさに課題は山積しています。そのような現状の中で、根拠に基づくお話は、とても貴重な提案であり諸問題の解決に向けた突破口になると思います。

おしゃべり会 感想

▼アメリカでは、保護者を巻き込んだデモが行われているのは、とてもすごいことだなと思いました。もっと教育にみんなが熱くなるよう必要があるのだらうと思いました。

▼講演のお話をさらに深めることができませんでしたし、他の方のご経験やご意見を伺える貴重な時間でもありました。

▼いろいろな立場の人がいて、自分には無い視点で話されているのを聞くと、勉強になります。全体の中で手を挙げて話すほどのことではないけれど、感想ぐらいはちよつと言いたいなというときに、ブレイクアウトルームは有効ですね。

実行委員感想

◆講師との連絡係をして

西部 矢原佳子

最初は鈴木大裕事務所とのやり取りでした。通常、オンライン講演会の場合、後日視聴期間は1週間とのこと。当日都合のつかない方も多いので頼み込み、期間を2週間に伸ばしていただきました。

また、講演会后、ニュースに講演会要旨を載せる際、鈴木さんにチェックしていただく時間が少なくて済むよう、こちらで責任をもつてまとめてニュース原稿を送ることで了解していただきました。

鈴木さんは「教育とは何か？」の問いに、「バケツを満たすことではなく、心に火をつけること」とおっしゃいました。大事なことを思い出させていただいたと思います。

◆初めて裏方作業から参加して

東部 堀川正恵

実行委員会では、講師の方の著書や記事についての情報共有や、当日の配信に向けてのリハーサルをしたり、打ち合わせが対面でなくZoomだったり、年代の違うメンバーとのやりとりも自分にはとても新鮮でした。

講演テーマも、準備段階から期待も膨らんでいましたが、お話はとても重要なポイントがたくさんあり、素晴らしい内容でした。

個人的には「フレーミング」についてのお話が興味深かったです。社会の中で、あらゆる場面でこれが当てはまる気がします。狭い枠の中での議論は思考停止するだけで根本的問題の解決にはならない。その視点で周りを見ると、私達は既に受け身で従順な民衆になっているのでは、とはっとしました。私達が受けてきた公教育がそうさせてきたのか、日本の

社会そのものがそうなってしまうているのか、どちらにしても、そこに気付かないと本質的な問題の解決にはなりません。物事の本質をきちんと考えられる思考力を育めるような公教育が、これから特に重要になってくると感じました。そして私達大人は、枠組みに捉われることなく物事をとらえ、議論する姿勢を持たないといけないと思いました。

◆誰やねん？鈴木大裕さん

東部 鮫島佳代子

「鈴木大裕さん講演会の実行委員会があるから参加して」と誘われ、気軽に参加してしまっただけでした。最初は「誰やねん？」と言う感じがした。新聞記事の読み合わせでなんとなく「へえ。」と思い、講演会を聴いて「すごい人やん。考え方もめちゃくちゃ共感できる人やん。」になりました。Zoomに慣れてなく、実行委員会2回目は仕事が忙しく気づいたときには終わっていました。講演会までの数の報告に面食らった感じもありました。会のみなさんが、意見交流しながら、会の目的を広めようと声かけする努力は、子ども劇場に学ぶ

ものがあるなあと感じております。

教育制度をどこから見直すか、今の時代の政治経済をどう変革していくか、私たちの市民運動の中で、なぜ「を」をどう深掘りしていくか、小さな一歩をコツコツと継続していくことかなと実行委員を経験して思いました。

◆実行委員長を受けて

東部 吉谷順子

何回目の実行委員長だろうか。昨年から実行委員になった会員が、学んで拡げる事が出来るような実行委員会にしたいと思いいなりに考えて実行委員会を組み立てた。事前に北九州での講演会に参加して、鈴木さんの人となりを感じることができたのも良かった。鈴木さんは、本以外に新聞やクレスコなどに寄稿されていたので、その中から選んで読み合せをして意見交流をしたが、知らないことをみんなで共有することができた。

講演会も素敵だったが、おしゃべり会に参加して楽しく、深く学ぶことが出来たと思う。実行委員になったことがない方、次回はぜひともご参加ください。

福岡市で子どもの権利に関する条例を、子どもと大人と一緒につくりませんか？

請願署名のよびかけ【案】

ふくおか教育を考える会協議会

1994年に国連の定めた子どもの権利条約を日本が批准しました。それから30年を過ぎた現在の福岡市で「子どもに権利がある」という視点をどれだけの人が持っているのでしょうか。子どもには権利があり大人には、それを守る義務があること、子どもの権利を守ると同時に他人の権利も守ることなど学びあい語り合わないといけないと考えます。子どもたちが、安心して生きる権利、自分らしく生きる権利、豊かに生きる権利、意見を表明する権利、余暇・休息の権利などが守られ、保証される取り組みが、福岡市ではなされているのでしょうか。

現在の少子化の急速な進行、不登校の急激な増加、いじめ、暴力の増加、青年・生徒・児童の自殺の増加。福岡市内に1か所しかない児童館、警固公園に深夜まで集まる居場所のない子どもたち、増え続ける児童相談、学校では教師が不足し、児童相談所での相談員の不足など。福岡市は他の政令都市や近隣市町村に比べて子ども対策の貧困さがみられます。

子どもにやさしい街づくりを進めることは、すべての人にやさしい街づくりにつながります。

子どもの権利に関する条例を福岡市でつくる意義としては、子どもの権利を基盤とした子ども施策を確実に実施する根拠となります。子育て支援だけでなく子ども自身を支援するという視点ができます。そのことにより子どもの学び場、居場所、遊び場、子どもの貧困対策、子どもの虐待対策、子どもが安心して相談できる、公的で独立した機関設置などが見込まれます。

また、条例制定により市民、市職員、関係者などの子どもの権利に対する意識が高まり、子どもたちへの接し方が変わり、子どもの声を聞きながら、継続的で安定した施策が作られることが期待できます。また、条例設置により子どもの権利を回復するための子ども権利相談室や子どもオンブズマン制度、子どもの声を代弁するアドボカシーなどの仕組みも合わせて設置ができます。

私たちは、福岡市に子どもの権利に関する条例制定を求めます。そして賛同する団体、個人の方と一緒に学び、働きかけ、行動することを呼び掛けます。

2026年10月をめどに請願を署名と共に福岡市議会提出に向けて、2026年4月から署名をスタートさせる予定です。学習会企画・参加、子どもと大人の企画考案、請願書・署名作成、署名集めなどに取り組み、共に歩みを進めていきたいと思います。多くの団体個人の参加を求めます。

「今なぜ、包括的性教育が必要なのか

～自分も自分以外の人も大切にするために～

講師:浅井春夫さん

<プロフィール>

日本福祉大学大学院(社会福祉学専攻)修了

立教大学名誉教授、一般社団法人「人間と性」教育研究協議会



「包括的性教育」とは「自分と自分以外の人も大切にする方法」を学ぶ人権教育です。子どもや青年たちに目を向けると、自尊感情の低さやいじめ、虐待や性暴力、望まぬ妊娠など、さまざまな生きづらさを抱えています。子どもや青年の性と生を支えるにはどうしたらよいのでしょうか。また一人ひとりが大切にされる環境や社会には何が必要なのでしょう。「性教育にどうしても抵抗がある・・・」「気になっているけど、何から始めたらいいのかわからない・・・」そんな疑問や悩みを一緒に学び、考えてみませんか？

●日時:2026年1月24日(土)

◆講演会/13:00~14:30 おしゃべり会/14:45~15:45

◆アーカイブ視聴(講演のみ)➡配信期間予定 1/27(火)~2/27(金)



●参加費:1,000 円

お申込みはお近くの委員さん、または QR コード

2025 年度ふくカフェ開催

ふくカフェはオンライン会員の交流会です。

今年度も小学校の先生に「子どもの様子、学校、教育」などの話題提供の後、日頃感じていることを何でもおしゃべりしています。地域会員の方も参加 OK。



◆Zoom 開催/20 時~21 時 30 分
<年間5回>・7/21(月)・9/22(月)・11/24(月)・
2026/1/26(月)・3/30(月)

オンライン会員募集中です！

遠くに住んでいる方、地域の活動には参加が難しい方、教育や子育てに関心がある方、ぜひオンライン会員にお誘いください。

◆年間会費 2,000 円 (半期 1,000 円)

<ワニブタカレンダー販売中>

子どもの文化権(31 条)の保障で、豊かな「子ども時代」を実現しよう！



毎月の絵と言葉が好評です。
おうちのトイレに！教室に！
子どもと一緒に楽しめます。
1000 円 (別途送料 270 円)
★問い合わせは各会へ